

国内の畜産物の需給動向

牛肉

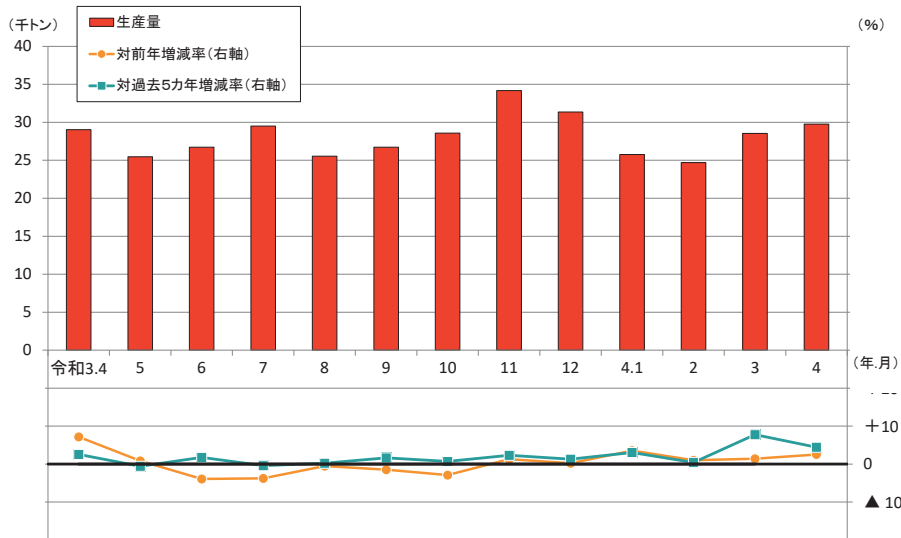
4年4月の牛肉生産量、前年同月比2.5%増

1 令和4年4月の牛肉生産量は、2万9766トン（前年同月比2.5%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万4415トン（同2.5%増）とわずかに、交雑種は7747トン（同8.9%増）とかなりの程度、いずれも前年

同月を上回った一方、乳用種は7128トン（同3.1%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、4.4%増とやや上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



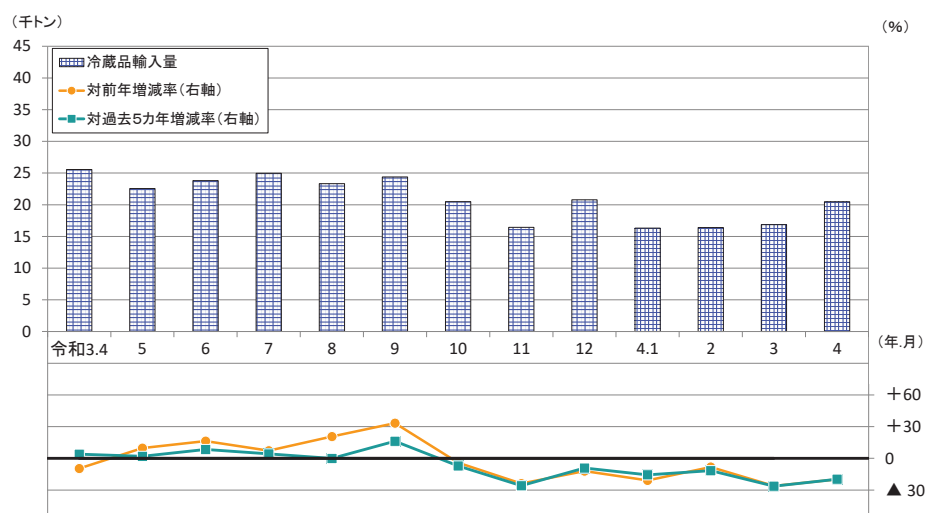
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 4月の輸入量は、冷蔵品は、米国産および豪州産の現地相場が高いことに加え、豪州産の生産量の減少や物流の混乱などにより、2万477トン（同19.9%減）と前年同月を大幅に下回った（図2）。冷凍品は、前年同月の輸入量が少なかったことなどから、4万1003トン（同38.0%増）と前年

同月を大幅に上回った（図3）。この結果、全体では6万1521トン（同11.3%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

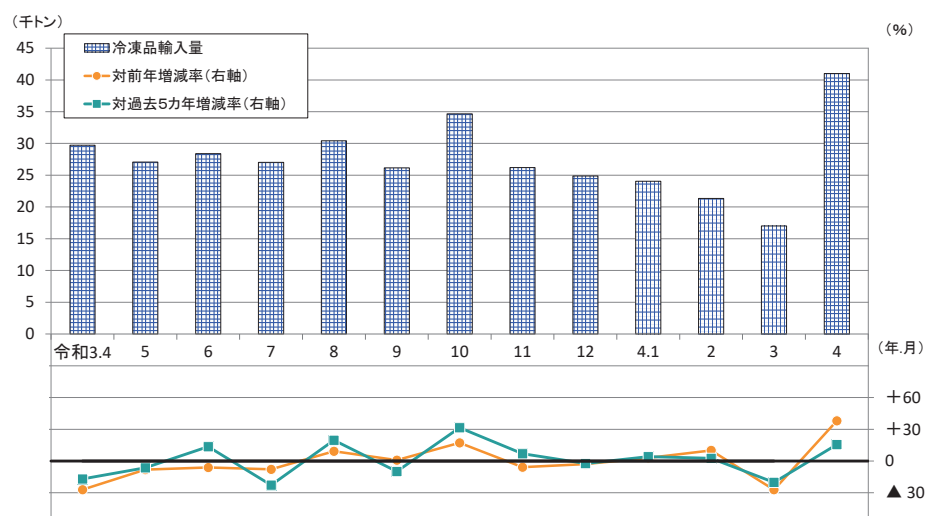
なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は19.8%減と大幅に下回る結果となった一方、冷凍品は15.6%増とかなり大きく上回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 4月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は170グラム（同10.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較でも、11.1%減とかなり大きく下回る結果となった。

一方、外食産業全体の売上高（同13.5%増）は、3月22日以降全国でまん

延防止等重点措置が解除されたことから前年同月をかなり大きく上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、デリバリー、ドライブスルーが引き続き堅調だったことから、同10.7%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含む

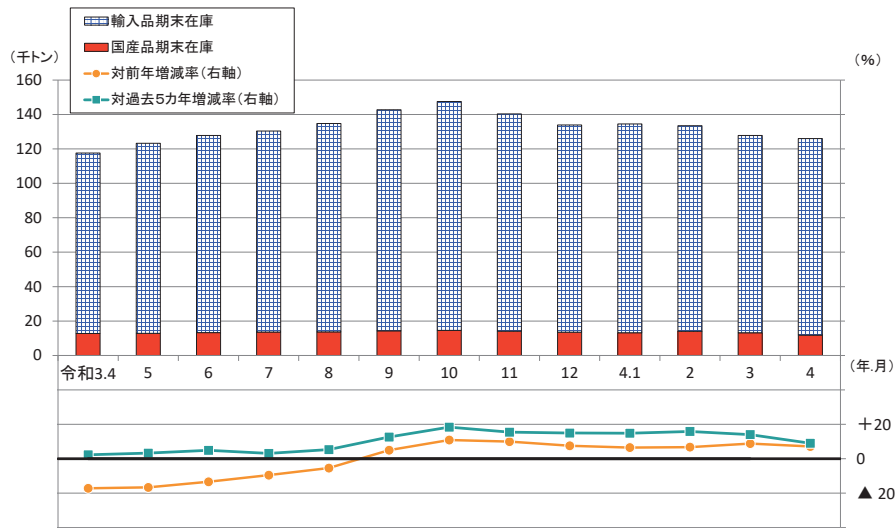
ファーストフードの和風は、夜間の店内営業の再開や、新商品の売れ行きが好調だったことから、同7.9%増と前年同月をかなりの程度上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、家族客の戻りが好調で、夜間営業も再開されたことから、同28.1%増と前年同月を大幅に上回った。

4 4月の推定期末在庫は、12万6013トン（同7.1%増）と前年同月をかなりの程

度上回った（図4）。このうち、輸入品は11万4213トン（同9.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

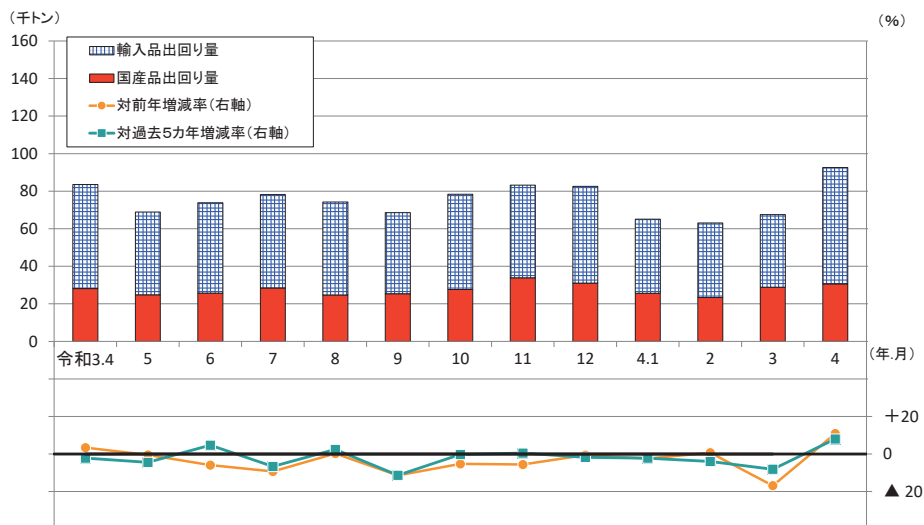
推定出回り量は、9万2576トン（同10.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図5）。このうち、国産品は3万613トン（同9.0%増）とかなりの程度、輸入品は6万1963トン（同11.8%増）とかなり大きく、いずれも前年同月を上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 前田 絵梨)

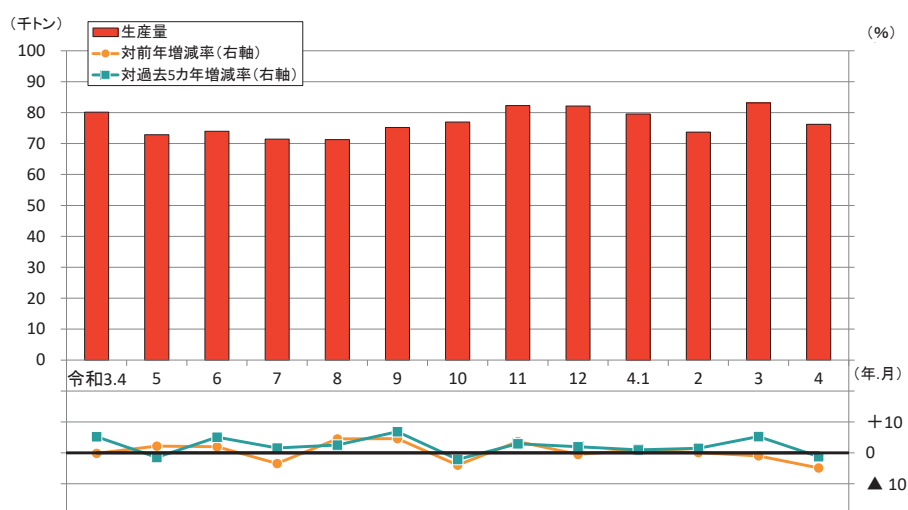
豚肉

4年4月の豚肉生産量、前年同月比4.9%減

1 令和4年4月の豚肉生産量は、7万6226トン（前年同月比4.9%減）と前年同月をやや下回った（図1）。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、1.2%減とわずかに下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



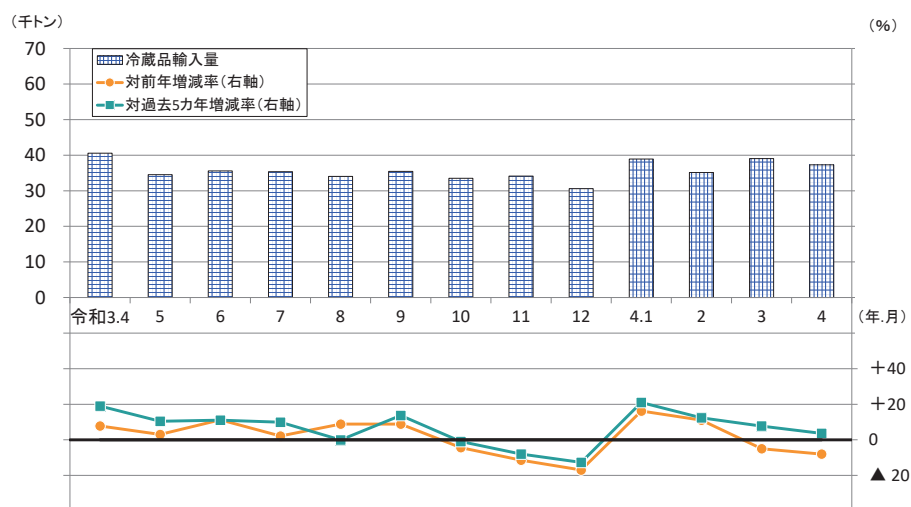
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 4月の輸入量は、冷蔵品は、前年同月の輸入量が、巣ごもり需要の影響などにより多かったことに加え、最近の北米における国内需要の増加による現地価格の高騰などから、3万7303トン（同8.0%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。一方、冷凍品は、前年同月の輸入量が、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による外食需要の減少や、アジア諸国を中心とした旺盛な買い付けなどに伴う

現地価格の高騰により少なかったことなどから、7万1508トン（同23.1%増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、全体でも10万8816トン（同10.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

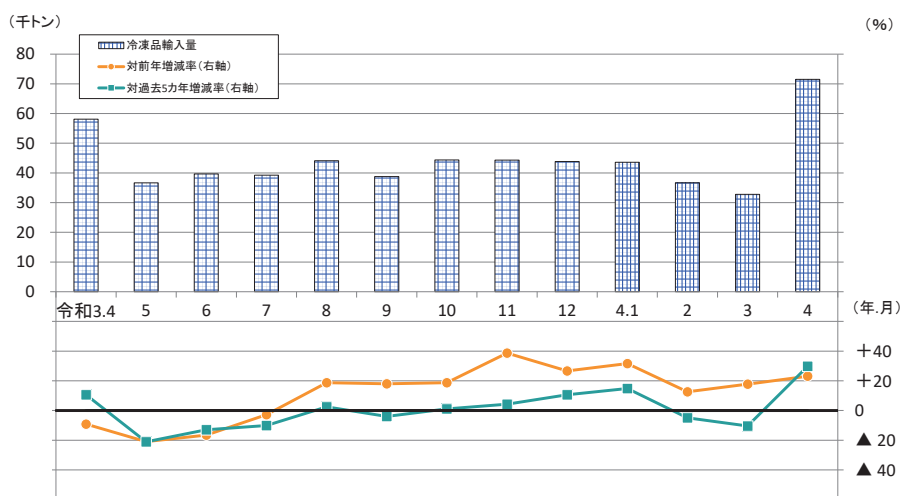
なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は3.6%増とやや、冷凍品は29.8%増と大幅に、いずれも上回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 4月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、642グラム（同1.2%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

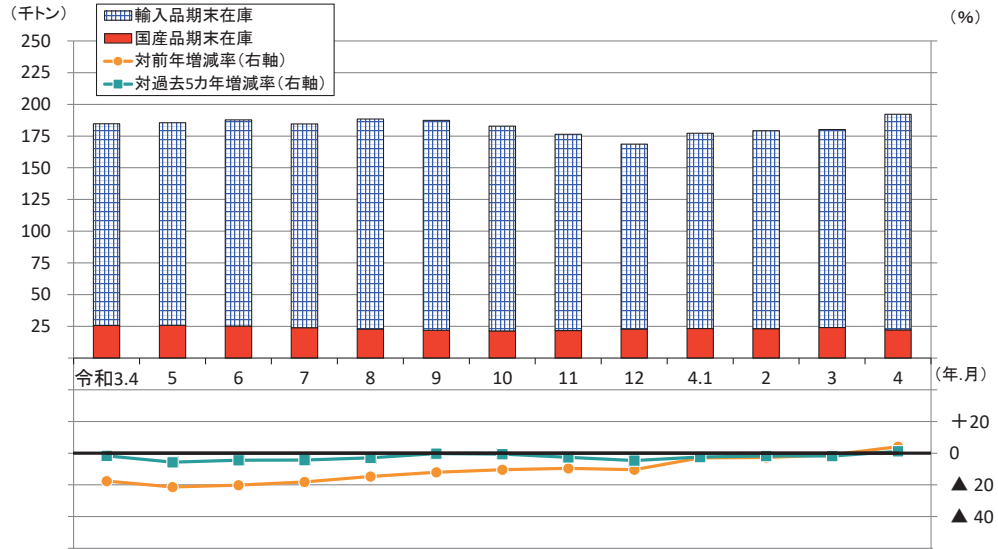
なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較では、4.2%増とやや上回る結果となった。

4 4月の推定期末在庫は、19万2212トン（同4.1%増）と前年同月をやや上回った。

このうち、輸入品は、16万9980トン（同6.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。

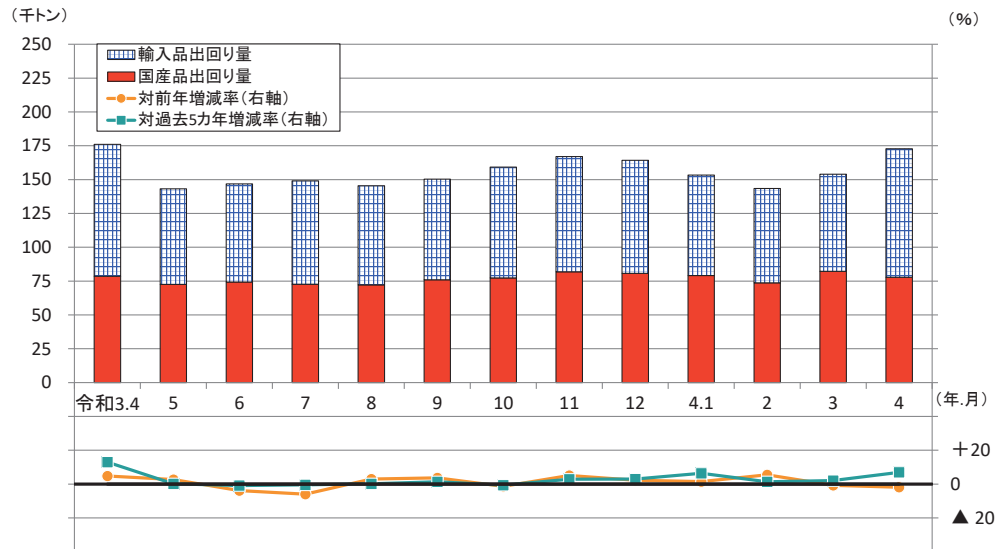
推定出回り量は17万2770トン（同1.8%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は7万7840トン（同0.9%減）、輸入品は9万4930トン（同2.6%減）と、ともに前年同月をわずかに下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

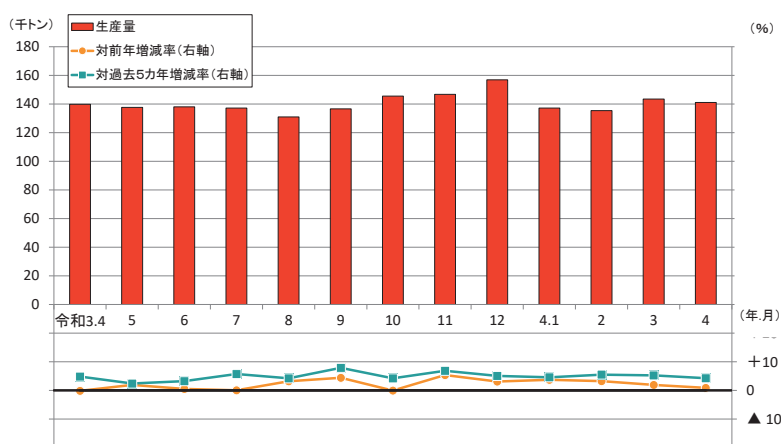
鶏肉

4年4月の鶏肉生産量、前年同月比0.9%増

1 令和4年4月の鶏肉生産量は、好調な需要を背景に、14万1073トン(前年同月比0.9%増)と前年同月をわずかに上回った(図1)。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、4.3%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



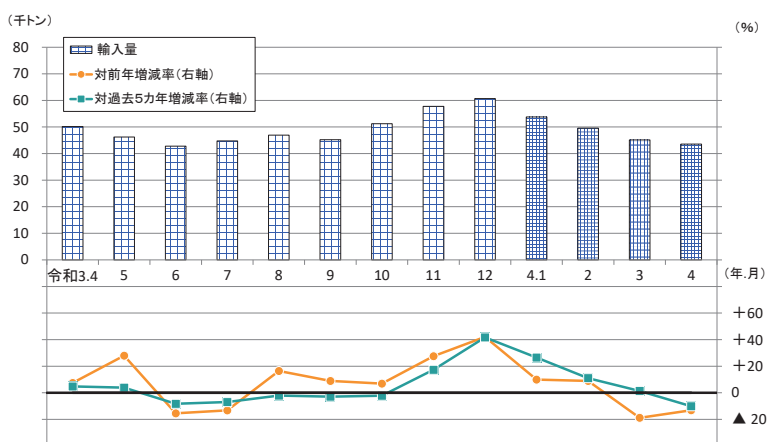
資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

2 4月の輸入量は、タイにおいてCOVID-19の影響などにより減少した生産量の回復が遅れていることや、ブラジル産の買い付け時にオファー価格が高騰していたことなどから4万3566トン(同

13.1%減)と前年同月をかなり大きく下回った(図2)。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較でも、10.1%減とかなりの程度下回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

3 4月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、520グラム（同2.2%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

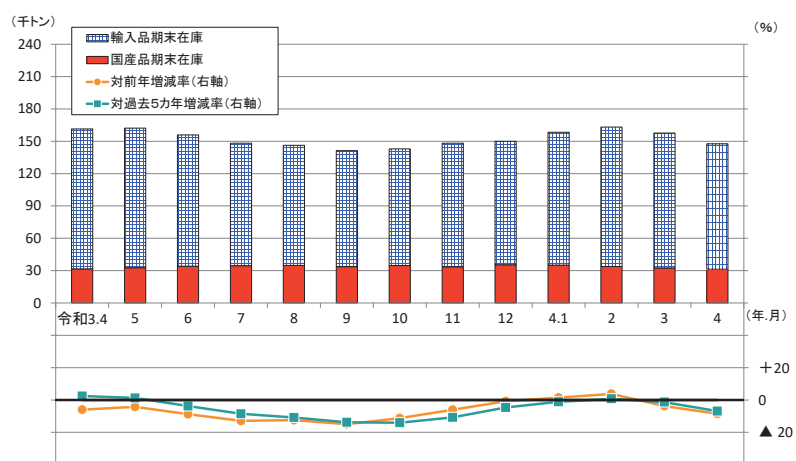
なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較では、3.5%増とやや上回る結果となった。

4 4月の推定期末在庫は、14万7646トン（同8.5%減）と前年同月をかなりの程

度下回った（図3）。このうち、輸入品は11万6299トン（同10.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

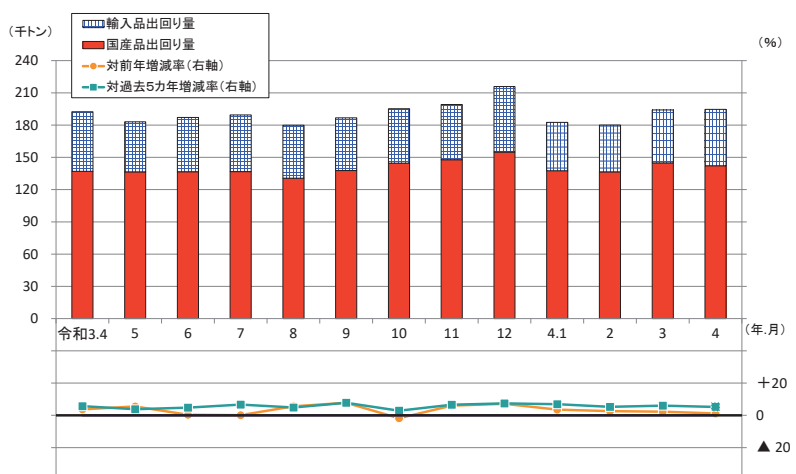
推定出回り量は、19万4646トン（同1.2%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は14万2219トン（同3.8%増）と前年同月をやや上回った一方、輸入品は5万2427トン（同5.4%減）と前年同月をやや下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 郡司 紗千代)

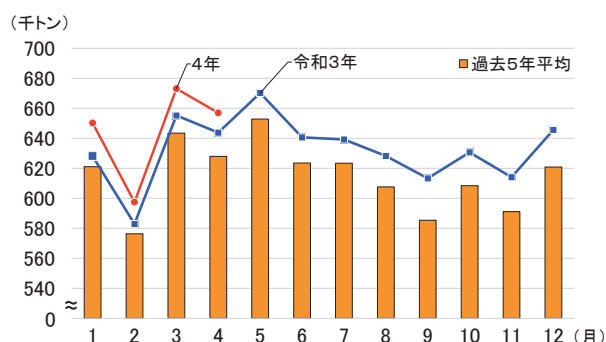
牛乳・乳製品

4年度の生乳生産量、前年度をわずかに上回る見込み

4月の生乳生産量、前年同月比2.0%増

令和4年4月の生乳生産量は、65万6967トン（前年同月比2.0%増）と前年同月をわずかに上回った（図）。地域別に見ると、北海道は36万3741トン（同3.5%増）とやや増加し、都府県は29万3226トン（同0.3%増）と前年同月並みとなり、堅調に推移した。

図 生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

4年4月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、32万7714トンと前年同月並みとなった。なお、業務用向け処理量については、2万5954トン（同2.8%減）と前年同月をわずかに下回ったものの、COVID-19拡大の影響を受けたと考えられる2年4月からは20.4%増となった。

乳製品向けは、32万5528トン（同4.3%増）と前年同月をやや上回った。品目別に見ると、クリーム向けは、6万513トン（同5.8%増）と前年同月をやや上回り、チーズ向けは3万9217トン（同2.4%減）と前年

をわずかに下回った。脱脂粉乳・バター等向けは、17万8950トン（同5.9%増）と前年同月をやや上回った。脱脂粉乳の4月末の在庫量は10万652トン（同20.1%増）となり、10万トンを超えた（農林水産省「牛乳乳製品統計」、独立行政法人農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

4年度の生乳生産量、前年度比0.8%増の見込み

一般社団法人Jミルクは令和4年6月3日、「2022年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」を公表した。これによると、4年度の生乳生産量は、北海道で439万9000トン（前年度比2.0%増）と引き続き増産が見込まれる一方で、都府県では331万1000トン（同0.7%減）と3年ぶりに前年度を下回ることが見込まれており、全国の生乳生産量は771万トン（同0.8%増）と4年連続の増産となり、前年度に引き続き750万トンを超える見通しである^(注)（表）。

なお、4年度の乳用雌牛飼養頭数を見ると、特に生乳生産を担う2歳以上については、今年度末には、北海道で約4000頭増加する一方、都府県では4000頭減少し、全国では前年度並みに推移するものと見込まれている。

また、生乳の用途別処理量の見通しとしては、飲用等向けは405万5000トン（同0.1%増）と前年並みの水準にとどまる一方、乳製品向けは360万5000トン（同1.6%増）と増加が見込まれている。内訳を見ると、チ

ーズ向けが46万トン（同5.4%増）、生クリーム等向けが127万トン（同1.9%増）と増加する見通しであるものの、生乳生産量の増加などが影響し、脱脂粉乳・バター等向けは

187万5000トン（同0.6%増）と前年度を上回る見通しである。

（注） 全国の生産抑制の取り組みは考慮していない。

表 生乳生産量の見通し

（単位：千トン、%）

	北海道		都道府県		全国	
		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)
令和元年度	4,092	3.1	3,270	▲ 1.3	7,362	1.1
2年度	4,158	1.6	3,275	0.1	7,433	1.0
3年度	4,311	3.7	3,335	1.8	7,647	2.9
4年度 (見通し)	4,399	2.0	3,311	▲ 0.7	7,710	0.8

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、一般社団法人Jミルク「2022年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」

注：令和元～3年度は実績値。4年度は見込値。

令和4年度のバターおよび脱脂粉乳輸入枠、1月時点から据え置き

農林水産省は6月3日、令和4年度の国家貿易によるバターおよび脱脂粉乳の輸入枠数量の検証結果を公表した。これによると、バ

ターおよび脱脂粉乳はいずれも十分な在庫があることから、本年1月に設定された輸入枠数量（バターは7600トン、脱脂粉乳は750トン）は据え置くこととなった。

（酪農乳業部 小木曾 貴季）

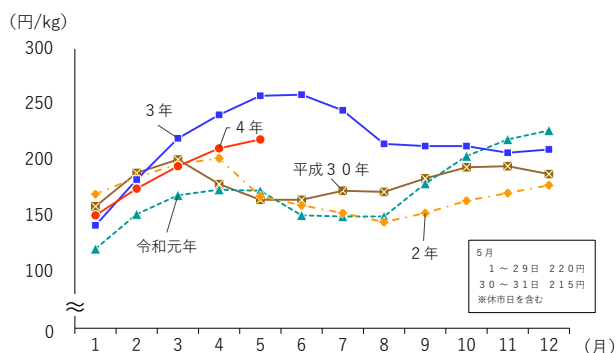
鶏卵

5月の鶏卵卸売価格、前年同月を下回るも高水準で推移

令和4年5月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、前年同月の同価格が令和2年度シーズンの高病原性鳥インフルエンザの大規模な発生による生産量の減少から高水準で推移していたため、1キログラム当たり219円（前年同月比39円安）と前年同月を下回った（図1）。なお、過去5カ年の5月平均との比較では、11.7%高とかなり大きく上回る結果となった。

例年、年明けに下落した同価格は、春先に向けて上昇し、夏の低需要期に再び下落する傾向がある。5月の日ごとの推移を見ると、前月の4月26日に上伸した220円から始まり、例年通り、大型連休明けは滞留玉により入荷量が増加したものの、低下することなくもちあいが続き、5月30日に215円に下落した。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移

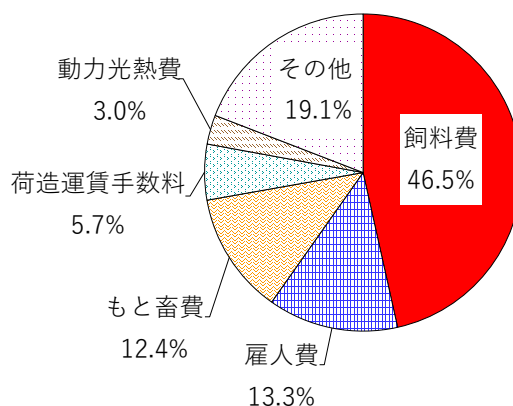


資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

これは、5月上旬は3年ぶりにCOVID-19対策に伴う移動制限のない大型連休となり人出が増加したことから、業務・加工向けの荷動きが好調となったものとみられる。5月下旬は各地で最高気温が30度を超え、気温の上昇に伴う需要の減少を受けて同価格が低下したものとみられる。また、まん延防止等重点措置の解除に伴う内食需要の低下などから、量販店向けの引き合いに落ち着きが見られたという声も聞かれた。

今後について、供給面は、採卵用めすひなえ付け羽数の出荷・え付け動向からは生産量が増加基調となることが見込まれる。しかしながら、従来、採卵養鶏の経営費の約5割を占める飼料費が、トウモロコシをはじめとする原料価格の高騰により増加している状況にある（図2）。そのため、減羽などの生産計画の見直しが行われるという見方もあり、不透明な状況となっている。需要面では、夏季の食欲減退といった季節要因に加え、内食需要の落ち着きが見られることから、家計消費による需要の増加も見込みにくい状況となっている。一方、外食需要が戻り始めたことに伴う業務用需要の回復や、外国人観光客受け入れが条件付きで再開されたことに伴うインバウンド需要の回復が期待されている。

図2 採卵養鶏経営費の構成



資料：農林水産省「令和2年営農類型別経営統計」
注：数値は全階層の平均。

鶏卵の家計消費購入数量、まん延防止等重点措置解除後も内食需要は継続

国内で消費される鶏卵の96%以上が国産品によって賄われていることから、わずかな需給の変化が卸売価格の形成に変動を与える構造となっている。また、消費量全体の約5割が家計消費へ、約3割が業務用へ、約2割が加工用へ仕向けられているとされており、家計消費の動向が卸売価格に与える影響は大きい。

家計消費の動向を見ると、令和4年4月の鶏卵の購入数量は、全国1人当たり917グラム（前年同月比6.2%減）と前年同月

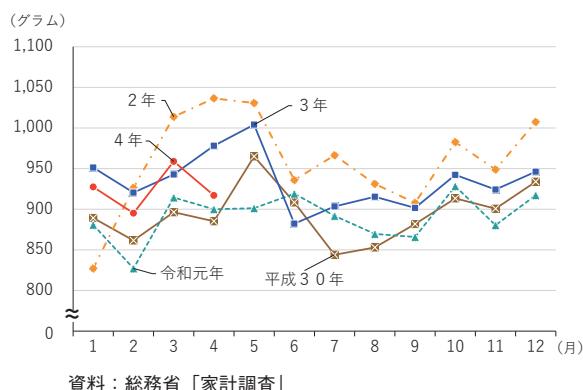
をかなりの程度下回った（図3）。また、COVID-19拡大前の過去5カ年（平成27年～令和元年）の4月の平均購入数量（同884グラム）と比べると、同33グラム（M玉換算でおおよそ0.5個相当^{（注）}）多い結果となった。

COVID-19拡大を背景とした内食需要の拡大から、2年2月以降、鶏卵の消費量が伸び、12カ月連続で前年同月の購入数量を上回った。その後、2年の水準を下回ってはいるものの、年間を通して高水準での推移が続いている。

一方、昨年からの小麦や食用油脂などの高騰を背景とした食料品価格の相次ぐ値上げを受け、消費者の節約志向がさらに高まることなどが予想されている。そのため、今後の消費者の意識の変化がどのように鶏卵の消費動向に反映されていくのかを注視する必要がある。

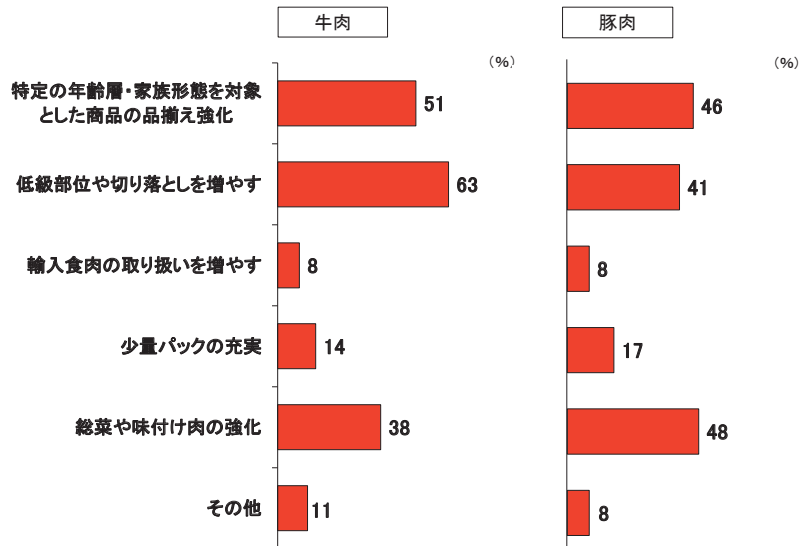
（注） 鶏卵M玉の平均卵重61グラム／個で換算した数量。家計調査の「卵」の項目には、鶏卵の他、ヨード卵、烏骨鶏（うこっけい）の卵、ちゃぼの卵、うずらの卵、あひるの卵、くんせい卵、ピータン、うずら卵の水煮、ゆで卵、温泉卵が含まれる。

図3 鶏卵の家計消費購入数量の推移（全国1人当たり）



（畜産振興部 郡司 紗千代）

図16 販売拡大に向けた対応（食肉専門店）



資料：農畜産業振興機構「食肉販売動向調査結果（2022年度上半期）」
注：複数回答。

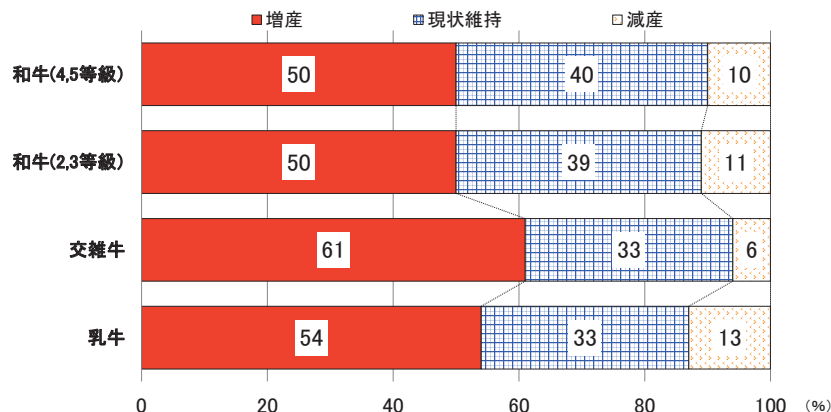
8 小売業者において国産牛肉に期待すること

(1) 生産量

量販店においては、すべての区分で「増産」を期待する回答が最も多かった（図17）。その理由については、和牛（4、5等級）で、「4等級の増産を希望する」、和牛（2、3等級）で「価格面で売りやすい4等級から3等級にシフトしてほしい」、交雑牛で「輸入牛の仕

入価格上昇に伴い、需要が交雑牛にシフトしている」、乳牛で「低価格の国産牛肉を増やしてほしい」などが挙げられた。一方、減産を望む理由については、和牛（4、5等級）で「5等級の増加を抑制していくことで、等級ごとに適正価格での販売が実現できる」などであった。

図17 今後の国産牛肉の生産量に期待すること（量販店）

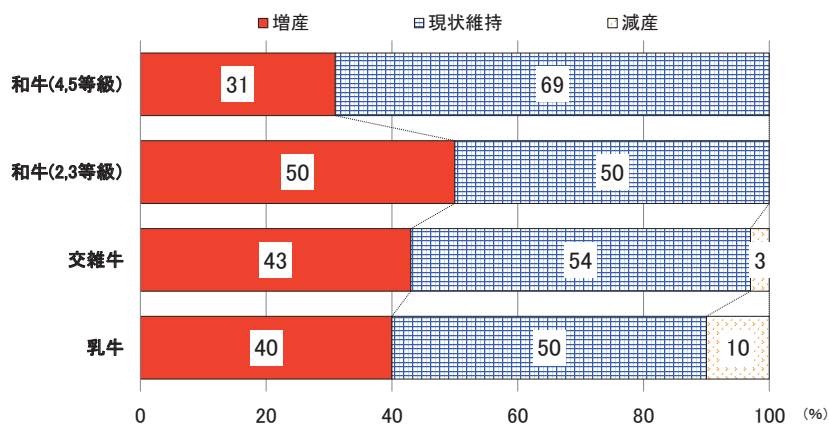


資料：農畜産業振興機構「食肉販売動向調査結果（2022年度上半期）」

一方、食肉専門店においては、和牛（2、3等級）を除いたすべての区分で「現状維持」という回答が最も多かった（図18）。増産を期待する理由については、和牛（4、5等級）で「輸出向けが多くなって小売店には良質で安価な牛肉が入荷しにくくなったため」、和牛（2、3等級）で「赤身が多く、柔らかい

肉を期待している」、交雑牛では「流通している量が少ない。もっと増やしてほしい」、乳牛で「一般向けの牛肉を増やしてほしい」などが挙げられた。また、区分に関係なく、「枝肉の軽量化、小サイズにしてほしい」「歩留まりの高い牛肉を期待したい」という意見も見られた。

図18 今後の国産牛肉の生産量に期待すること（食肉専門店）



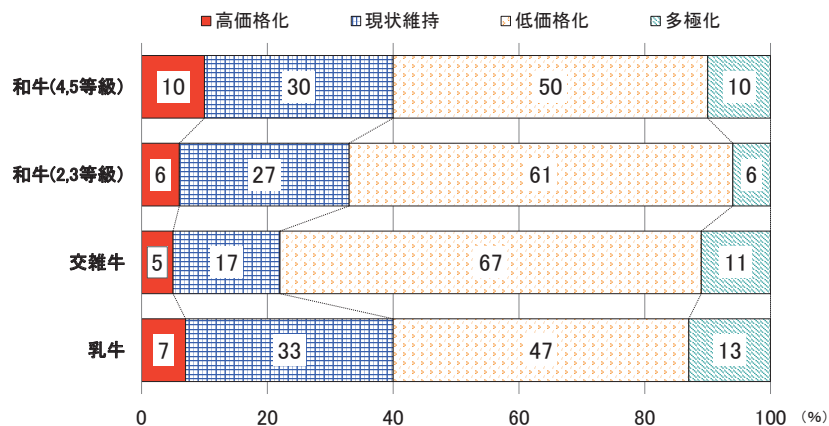
資料：農畜産業振興機構「食肉販売動向調査結果（2022年度上半期）」

（2）卸売の価格帯

量販店においては、すべての区分で「低価格化」が最も多く、次いで「現状維持」であった（図19）。低価格化を望む理由については、和牛（4、5等級）で「量販店では4等級、5等級の価格帯では売りにくい。3等級

並みの価格が理想」、和牛（2、3等級）で「仕入価格を1円でも下げて頂き、多くの顧客に低価格で販売したい」、交雑牛で「輸入牛の仕入価格上昇に伴い、需要が交雑にシフトしている」、乳牛で「低価格の国産牛肉を増やしてほしい」などが挙げられた。

図19 今後の国産牛肉の卸売の価格に期待すること（量販店）

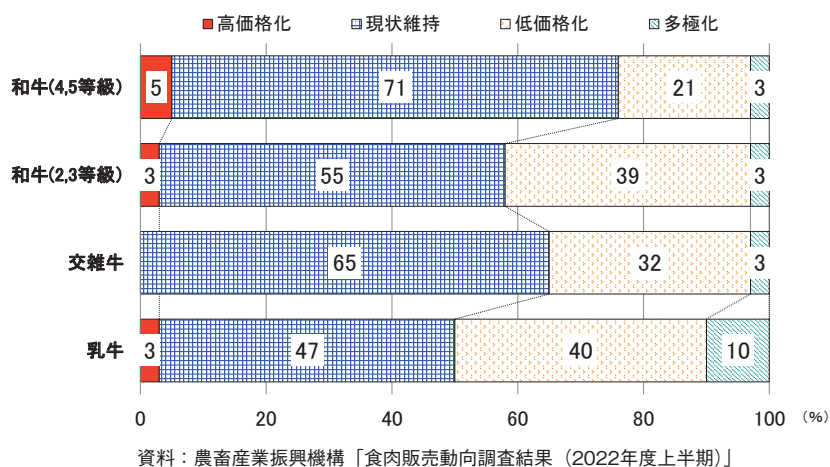


資料：農畜産業振興機構「食肉販売動向調査結果（2022年度上半期）」

一方、食肉専門店においては、すべての区分で「現状維持」という回答が最も多く、次いで「低価格化」であった（図20）。現状維持とした理由については、「現状のままで満足」といった回答が多かった。低価格化を望む理由については、和牛（4、5等級）で「価格もまだまだ一般消費者にとって高額であ

り、脂肪が多く、高齢者でも食べられる様にしてほしい」、和牛（2、3等級）で「低価格で出荷できるよう、また、赤身の肉で柔らかい肉を期待する」、交雑牛および乳牛で「低価格の国産牛肉を増やしてほしい」などが挙げられた。

図20 今後の国産牛肉の卸売の価格帯に期待すること（食肉専門店）



（3）産地銘柄牛の生産

量販店においては、すべての区分で「現状維持」が最も多かった（図21）。増加を望む理由については、和牛（4、5等級）で「品質の高い産地銘柄牛を増産してほしい」、交雑牛で「産地銘柄の増産を希望する」などが挙げられた。

食肉専門店においては、すべての区分で「現状維持」が最も多く、次いで「増加」であった（図22）。現状維持の理由については、「産地銘柄にはこだわらずに売りたい」といった回答が多かった。増加の理由については、「銘柄の特徴を明らかにし、特徴ある銘柄を増やしてほしい」などが挙げられた。

図21 今後の国産牛肉の産地銘柄に期待すること（量販店）

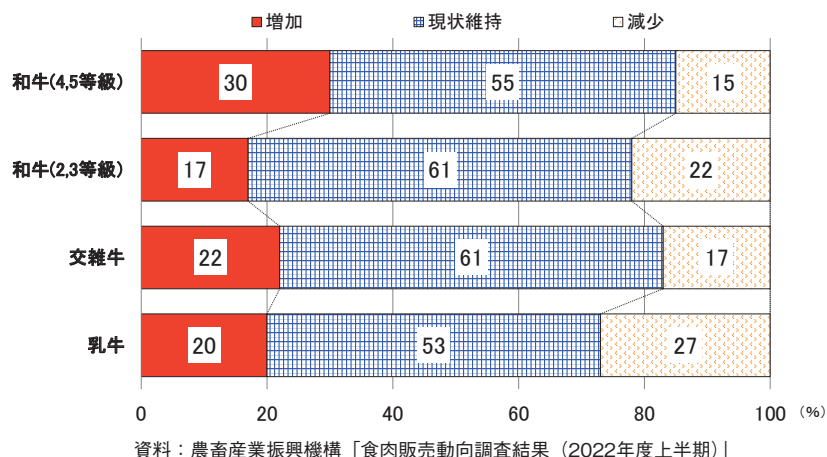
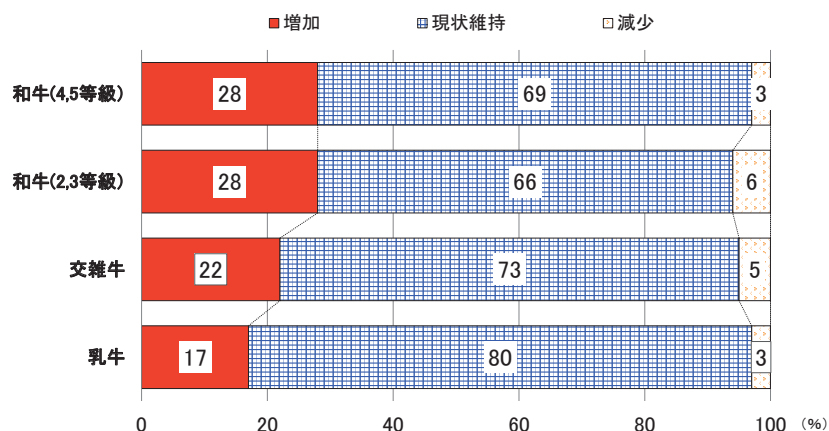


図22 今後の国産牛肉の産地銘柄に期待すること（食肉専門店）



資料：農畜産業振興機構「食肉販売動向調査結果（2022年度上半期）」

9 おわりに

令和3年度下半期における卸売業者の販売状況は、長引くCOVID-19の影響下で、外食需要の回復の遅れや内食需要の増加の反動から、減少が増加を上回ったものの牛肉、豚肉ともに上半期とおおむね同程度の取り扱いとなった。4年度上半期の販売見通しでは、国産牛肉の取扱いは、増加や同程度とする意見が多かったものの、輸入牛肉は「現地価格高騰により国産にシフト」といった意見にも見られる通り、冷蔵、冷凍ともに減少見通しが多くなる結果となった。

さらに、小売業者における販売状況は、特に量販店においてCOVID-19の影響による海外の物流の乱れなどを不安視し、輸入牛肉および輸入豚肉で減少傾向と回答する者が多くなっており、4年度上半期の販売見通しでも、輸入品の取扱いは減少傾向であった。一方で、国産品については、特に量販店において取扱量を増やしたいとする回答が多く、増産、現状維持といった安定的な供給が望まれる結果となった。

(参考) 調査の概要

1. 調査方法

アンケート調査

2. 調査対象先と回収率

右表の通り

3. 調査期間

2022年1月26日～2月18日

調査対象者と回収率

(単位：者)

	調査対象者数		
	①	回収数②	回収率 (%) ③=②/①
卸売業者			
牛肉	15	15	100
豚肉	13	13	100
小売業者			
量販店	20	20	100
食肉専門店	64	64	100

調査結果については、機構ホームページにて掲載しております。

https://www.alic.go.jp/r-nyugyo/raku02_000060.html